

Title	ジュール・ヴェルヌ『カリフォルニアの城： 転石苔を生ぜず』その2(翻訳)
Sub Title	Jules Verne, Les Châteaux en Californie : Pierre qui roule n'amasse pas mousse, Scènes IX-XVII (traduction)
Author	新島, 進(Niijima, Susumu)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2015
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.61 (2015. 10) ,p.31- 50
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20151031-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ジュール・ヴェルヌ

『カリフォルニアの城——転石苔を生ぜず』

その2 (翻訳)

新島 進 訳・解題

1852年に発表されたジュール・ヴェルヌ若き日の戯曲作品。詳細は連載第1回目（本誌49/50号、2009年）の解題に記したので繰り返さないが、訳出の主眼は、本戯曲とレーモン・ルーセルが用いた独自の創作方法〈手法〉とのあいだの関係を明確にすることにある。そこで注目すべきは、作品の副題になっている諺「転石苔を生ぜず」と、最後の一文「さまよえる父は苔（＝財産）を集めない」がほぼ同一一文でできていること（*Pierre qui roule n'amasse pas mousse / père qui roule n'amasse pas de mousse*）、また、女中カトリーヌの台詞のほとんどが諺や慣用句のもじりでできている点である。

今号での訳出箇所は作品の中盤にあたる第9幕から第17幕まで。前回と同様、カトリーヌが用いた地口を一覧表にして付す。

第1場～第8場の概略——パリの建築家デュブール氏は一攫千金をめざし、ゴールドラッシュに沸くカリフォルニアに旅立った。3年後、デュブール夫人は夫から帰国の知らせを受けとる。周囲の誰もが金採掘人の悲惨な現実を知るなか、夫人だけは夫が大金を持って帰ると信じて疑わず、すでに借金をして高級な衣服を買いこみ、盛大な晩餐会を開こうとしている。そんな折、青年アンリが、デュブール家の長女アンリエットとの結婚を申しこみにやって来る。二人は相思相愛の仲だった。だが夫人は、百万長者の娘となったア

ンリエットを貴族に嫁がせると言ってきかない。結婚を諦めきれないアンリはデュブール家の女中カトリーヌと協力し、来たるべき一家破産への対策を練る。

一方、カトリーヌにも、やはりカリフォルニアに渡ったまま行方不明になっている甥アレクシスがあり、このアレクシスはカトリーヌの娘クララと恋仲にある。アレクシスはデュブール氏に先がけて同家を訪ね（第2場）、カトリーヌがとり次ぎをするが、二人はお互いに相手が叔母、甥であることに気づかない。

以下、デュブール夫人にアンリエットとの結婚を断られたアンリが、アンリエット本人と再会する場面から。

第9場

アンリ、デュブール夫人、アンリエット

アンリ：（舞台に戻って）アンリエットお嬢さま！

デュブール夫人：（娘のほうに向かいながら）まあ！ アンリエット、つやつやのシルクのドレスを着なかったの？

アンリエット：（アンリのほうに駆け寄りながら）ああ！ アンリさん、会いたかった！

アンリ：（悲しげに挨拶しながら）お嬢さま……。

デュブール夫人：ねえ！ アンリエットたら、答えなさい？ なぜあの、つやつやのドレスを着なかったの？

アンリエット：着てどうなるのよ、ママン？

デュブール夫人：だってお前、ああいう美しいものは身につけてこそだわ。

お前は金持ちの幸せな娘、そうでしょ？

アンリエット：（アンリに手をさし出しながら）ええ、そうよ！ とっても幸せよ！

アンリ：（独白で）これは夢か！ 幻か！

デュブル夫人：（鏡の前で自分の姿を眺めながら）見て、私の帽子！ 被るのが楽しくて仕方ないわ。これは家に置いておくことにしましょう。

アンリエット：（アンリに）なぜ黙っているの！ 戻ってきたのに辛そうよ！ 私への気持ちはもう前とは違うの？ 私が変わってしまったように見える？

アンリ：（低い声で）私が恐れているのはまさにそれです！ 知らないのですか……あなたは百万長者なんですよ。

アンリエット：（まじめな顔で）なんのことを言っているの、アンリ？

デュブル夫人：（鏡の前を離れず、若者二人の話を聞いていない）見て、アンリエット、こういう帽子はつばがとても広がっているのよ。通路の庇みたいなつばの帽子しか持っていないデュビュイソンさんはおばかさんね！ 私はこの新しい型がとても好きだわ……。お前は？

アンリエット：ええ！ とても上品ね。（アンリに）じゃあ私が、財産なんかのせいで心変わりするとでも思ったの！

アンリ：（怖々と）お嬢さま……ご容赦を！ なにせ母上が……。

アンリエット：母は絵空事を信じているだけなの。私は母の夢が叶うよう神さまに祈っているわ、だって見こみ違いだってわかったらとても苦しむでしょうから。

アンリ：そしてあなたは、アンリエット？

アンリエット：私！ 私はね、凡庸なのが幸せなんだと思っているわ。もしも天の思し召しで、欲しくもない財宝をもらったとしても、どこかにこじんまりとしたわが家をつくるのに使うだけよ。二ヶ月前……私たちが望んだような……。

デュブル夫人：（アンリエットの言葉を聞き、独白で）なんですって！ あの子、なにを言っているの？

アンリ：（嬉々として）おお！ わが全生涯を捧げてもあがないきれぬほどのお言葉です、お嬢さま！

デュブル夫人：（わざと）アンリエット、カシミアを流行のやり方で畳むから手伝ってちょうだい。

アンリエット：はい、ママン。(母親の手伝いに行く)。

アンリ：(独白で) では、デュブル夫人は間違っていたのだ！ あんなこと一瞬でも信じたなんて……。

デュブル夫人：(ショールを肩にあてて) こうじゃないわ……これじゃ銘柄が見えない。だいたい私はこれを縦にして羽織りたいのよ。ああ、神さま！ なんて難しいの！(ショールを何度も折り返す)。

アンリ：(アンリエットに) ですがお嬢さま、母上は、華美な品々をあなたに望んでいます。あなたが欲せずとも、新しい財産に見合った高い位につけたいとお考えなのです。

アンリエット：どの財産のこと？

アンリ：(独白で) 父上のご帰還を知らないのだ！

アンリエット：それに地位が変わったからといって、どうして心まで変わるの？ 心は決して貧しくなんてならないわ。

デュブル夫人：(独白で) おお、おお！ 危ない橋を渡ってしまった。(二人のあいだに進んで)。アンリさん、会話に割りこんですみませんが、あなたは、つい先ほど私がお伝えしたことをもうお忘れのようですわよ。そしてアンリエット、疑いをかけるなんてそれはお父さまを侮辱することになりますよ！

アンリエット：お父さま！

デュブル夫人：いいかい、お父さまは投機そのもののようなお人なの。ああいう人には万事がうまくいくのよ！

アンリエット：ええ！ お母さま、お父さまは本当に幸せでしょうね。だって私たちに囲まれているのがお父さまの幸福なのだし、そのためには、ただ帰ってきさえすればいいのだから。お父さまが慈しみ、愛されている者たちの傍で暮らすだけでいいのよ！ 炉の端で子どもたちを楽しませ、喜びを分かち合う父こそが百万長者なのだから。

アンリ：(感動して) おお！ ありがとう、お嬢さま、重ねて、ありがとう！

デュブル夫人：(厳しい態度で) 将来の銀行家さんなら、カリフォルニア

に行った人たちが札束を抱えて戻ってくるってことをよく知っておくべきですわ！

アンリ：札束を抱えて戻ってくるなんて、奥さま！

アンリエット：（悲しげに）戻ってきてくれればいいのよ、お母さま！

デュブル夫人：（独白で）この青年がここにいると困ったことになるわ。

（声に出して、気づまりな様子で）アンリさん、すみませんね……大晩餐会は……今夜は開くことができません……。どうか……ご容赦願えればと……。

アンリ：私を追い出そうとしている！

アンリエット：（独白で）どういうことなの？ 私、涙が出そうよ！

アンリ：ともかくも感謝申し上げます、奥さま。（デュブル夫人に挨拶をする）。さようなら、お嬢さま！（独白で）こんなふうに暇をとるほうがまだましだ。少なくとも希望は残されているからな！（アンリエットが悲しげにお辞儀をする）。

デュブル夫人：お送りしますわ、アンリさん！（二人退場）。

第10場

アンリエット、独白

アンリエット：悲しいわ！ 母の言葉に心が痛む。ああ神さま、母は間違っています！ アンリのことを思うとこんなにも嬉しいのに。世界中の宝ももらったって私はこれほど幸せにはなれないのに！ お父さまがお帰りになったら、わかってくれるはず！ 一文無しで戻ってきてくれたらいいのだけど！ おお！ こんな考えはだめね、お母さまがあまりに気の毒なもの！ とにかくも、よかったことがひとつあるわ。大晩餐会は開かれない。これで私の手に入れた、なけなしのお金が一瞬で消えることはなくなったわけね。

第11場

アンリエット、カトリーヌ（はたきと箒を持って）

カトリーヌ：おやまあ！ また涙？

アンリエット：お前かい、カトリーヌ！

カトリーヌ：アンリさまとお会いにならなかったのですか？

アンリエット：逆よ、たった今、出ていったわ！

カトリーヌ：ああ、まったく、みんなのために陽気でいてくださいまし！
こんなボンペイのような騒ぎのなかだって⁽¹⁾……瓦礫も山の賑わいと言
いますから⁽²⁾！ たまげたことに、私は奥さまの言いつけで居間を磨き
にいかねばならないんです。どうしても夜会を開きたいようでして
ね！

アンリエット：（勢いよく）それはいつなの？

カトリーヌ：今晚ですよ、まったく！

アンリエット：でも、さっきママンはアンリさんに言ったのよ、晩餐はなし
だって。

カトリーヌ：アンリさまにはなし、ということでしょう。ですが奥さまには、
食事を崇りにくる客⁽³⁾がいらっしゃいます。

アンリエット：（泣きながら）ああ！ 神さま！ つまり暇をとらせた、
追っ払ったのね！ そうなんだわ！

カトリーヌ：（独白で）おっと！ 今度は私がお嬢さまをふっかける番だ
わ⁽⁴⁾。（声に出して）さあさあ、アンリエットちゃん！ 元気をだして、
辛抱よ……。待てばカイロにナイルあり⁽⁵⁾って言いますでしょ、ねっ！
荒っぽい言葉ですみませんが、私にも酷いことが雨駄洒落と降りかかって
きましてね⁽⁶⁾。気がつきゃ、吠え過ぎた蠟燭のような体たらくで⁽⁷⁾、も
う気が動転しちまって……。

アンリエット：（目を拭いながら）さあ、カトリーヌ、これは母に内緒でつ

くった刺繍よ。(刺繍をカトリーヌに渡して)。これを売って、催促されている借金を支払ってちょうだい。

カトリーヌ：お嬢さまは天使だわ！ 神が遣わされた戦士です⁽⁸⁾！ 奥さまはこんなことが起きているなんて知りもせず、私利熱烈なことばかり⁽⁹⁾！

アンリエット：お母さまには夢を見させてあげましょう！ 私はもっと働くわ、カトリーヌ、そしてお父さまがお帰りになるよう祈るわ！

カトリーヌ：おお！ お父上がお帰りになられるのは間違いないでしょう。ですが、どんななりで現われるか。諺にあるように、そこが肝臓です⁽¹⁰⁾。

アンリエット：誰か来たわ！ 私は行きます。目が真っ赤だもの。(アンリエット退場)。

第12場

カトリーヌ、アレクシス

アレクシス：(舞台奥から入場) デュブール男爵はご在宅でしょうか？ 確かにここだと念を押されて来たのですが。

カトリーヌ：(独白で) また、あの変わり者だよ！ (声に出して) いらっしゃいません。ご主人さまは、すばらしいコート⁽¹¹⁾なんて名の街にいらっしゃいます、さっきも申しあげましたが……。

アレクシス：(独白で、カトリーヌをじろじろ見ながら) 変だな！ この声音には確かに聞き覚えがある！

カトリーヌ：(腹を立てて) さあ！ いつまでそこに街灯みたいに突っ立っている⁽¹²⁾つもりですか……。

アレクシス：男爵がいつお戻りになるかご存じないですか？

カトリーヌ：すばらしいコート⁽¹³⁾から？ さあ！ 戻るだけならば、半年もあれば戻ってこられますが……。

アレクシス：(独白で、じろじろ見ながら) この声を聞くと気が落ち着かん！ (退場)。

第13場

カトリーヌ、独白

カトリーヌ：あの馬風⁽¹³⁾の鬚面ときたら！ まさか、あの男がお金を持ってくるのかねえ。いや、私にやむしろ、せびりに来たようにしか見えないけど。(家具を整える)。ああ！ 奥さまが少しでも食器でいれば⁽¹⁴⁾、あんな、たわし言などうっちゃってしまう⁽¹⁵⁾ものを。お嬢さまをあの青年と結婚させて、あとは、子どもたちのために宿題をあげる⁽¹⁶⁾だけでいいのに……。でも、だめね。鴨は結局、葱を背負って鍋に行くものなのだから⁽¹⁷⁾！ さあ掃除しましょ、なぜって掃除しなけりゃならないんだから！ 掃けば掃くほど埃が舞うこのへボな道具で……。あら！ 椅子の脚が一本、明後日の方向を向いているわ！（なんとか直す）。
 バカを捕まえる聖人⁽¹⁸⁾の百万をダンポにカシミアを手に入れる⁽¹⁹⁾なんてね！ 私はご主人さまのお帰りのために、なんならニスー賭けるわ。でも、はっきり言って、ご主人さまなど私たちにとって無用の臍物⁽²⁰⁾にしかならないはずよ！ つまるところね！

第14場

カトリーヌ、デュブル氏（古びた旅行鞆を引きずって入場。つぎはぎだらけの古ズボンをはき、船員が着る作業着のようなとっぴょうしもない服装をしている。幅広のつばのついた帽子のおかげでスペインの盗賊のような風采）

デュブル：おっと！ その椅子にもたれかかろう！（ひっくり返っている壊れた椅子に座りにいく）。

カトリーヌ：またよそ者が！ 今度の人は何の用かしら？

デュブル：三千リユーも旅して、たどり着いた先がこんな椅子とはね！

カトリーヌ：(腕を組んで) ああ、もう！　ウチの家具を壊しにきたんですか、あなたは？

デュブル：(地面に座ったまま) これが家具だって！　百万長者の家にしちゃ、なんともご親切なこった！

カトリーヌ：ご用はなんでしょう、施しですか？　ならば、さしあげるものはなにもありゃしませんよ……。

デュブル：(にやにや笑いながら) 奥さまは貧乏人を抱えているのかい？

カトリーヌ：ええ、旦那さん！　(独白で) 確かに貧乏人を抱えているわね！

デュブル：(カトリーヌをからかって) 博愛はまず家からはじまる^[1]、じゃないかね？

カトリーヌ：(独白で) この人、なにを言っているのかしら？　顔色も悪いし。泥棒かもしれない！

デュブル：(立ちあがり、大げさな役者のように部屋を歩きながら) こんなガラクタをここに置いとっちゃいかん！　全部持っていかせよう！

カトリーヌ：(独白で) 全部持っていく？　やっぱり泥棒だわ！　(声に出して) 守衛さんと呼ばなきゃならないかしら、まったくもう？

デュブル：どうしてだい、おかみさん？

カトリーヌ：おかみさん！

デュブル：さっき、わしを旦那さんと呼んだだろ！

カトリーヌ：(叫んで) 泥棒よ！

デュブル：(脅すような滑稽なしぐさで) 観念しな！

カトリーヌ：(金切り声で) 泥棒よ！　殺し屋よ！

デュブル：(笑いながら、独白で) よし、いいぞ！　いいぞ！　(いっしょに叫んで) 泥棒だ！　泥棒だ！

カトリーヌ：(跪いて) ああ！　盗賊さま、どうか奥さまだけは！　ご慈悲を、神さま！

デュブル：(独白で) へん！　善人と強盗の見分けもつかないとはね！

第15場

デュブール氏、カトリーヌ、デュブール夫人

デュブール夫人：(上手から入場) なんの騒ぎ？

カトリーヌ：イエスさま！ どこかの徒刑囚です、奥さま。

デュブール夫人：(独白で) 妻だ！

カトリーヌ：(夫だと気づかず) ああ！ 神さま！ 私たちが百万長者だっ
てことがもう知れ渡ったのね！ 身ぐるみ剥がしにきたのかわ！

デュブール氏：(仰々しく挨拶して) 奥さま！

デュブール夫人とカトリーヌ：(四方を駆けまわりながら) 助けて！ 守衛
さん！

第16場

デュブール氏、カトリーヌ、デュブール夫人、マルグリット、ポール、
アンリエット (彼らは四方から走ってくる)

アンリエット：どうしたの？ なにがあったの？

子どもたち：ああ！ ママン！ ママン！

カトリーヌ：(哀願しながら) お赦しを！

子どもたち：(嬉々として叫ぶ) あれ！ パパだ！ パパだよ、この人！(首
根っこに飛びつく)。

アンリエット：お父さま！ (同じく)。

デュブール：おお、自然とわき出る声よ！ 最初に気づいたのは子どもたち
だったな！

デュブール夫人：こっ！ この人！ デュブールなの？

カトリーヌ：まあ！ ご主人さま！

デュブル：(大げさに) わしだよ！

肉と骨を備えたね。見てのとおり、
今はとりわけ骨ばかりだが……。

デュブル夫人：(夫の腕のなかに身を投げて) おお！ あなた！

カトリーヌ：(独白で) ジャあ百万の
大金は階段のしたに置いてきたの
ね！ (一同、抱擁の場面)。

子どもたち：パパ、金でできたオモ
チャのおみやげは？

デュブル夫人：ああ！ あなた、私、
怖くてもうなにも言えないわ！ (腰
かける)。



デュブル氏の帰還

アンリエット：お母さま！ (いっときの沈黙)。

デュブル：マイアベアってのは実にたいした男だな。(歌いながら) そ
して金は、金はまぼろしに過ぎず^[2]！

デュブル夫人：(独白で) 様子が変わわ！ 頭がおかしくなってしまった
のかしら？

デュブル：たちまち消えてしまいやがる、あんな卑しい金属がなんだって
いうんだ！ あんなものを手に入れるために仕事をしたり、なくさないか
と気を揉んだりするなんて、そんな価値などありゃしないよ！

アンリエット：(愛情をこめて) お父さま、たぶん、ひどくお疲れなのね！
お休みになってはいかがですか？

デュブル：(浮ついた様子で) わしが、疲れている！ どうして？ ポ
ケットは空っぽ、胃は空っぽ、頭は空っぽで家に着いたんだ！ 今日ほど
自分が軽いと感じた日はないよ！ 風に持っていかれやしないかと、それ
だけが心配だった！

カトリーヌ：お食事になさいますか？

デュブル：おっと、おかみさん、わしがもう怖くはないのかね？ まだわ

しが誰かから盗みを働くように見えるかい？

カトリーヌ：むしろ、盗まれるようにも見えません！

デュブル：わしの社会的地位が持つ大きな特権さ！（妻に）さあさあ、お前、悲しむのはよそうや！ まったくの手ぶらで戻ってきたわけじゃないんだ。わしが持ち帰ったのはね……。

デュブル夫人（勢いよく）：なんなの？

デュブル：盛者必衰についての大きいなる哲学的確信だよ。一般的にはローマの、具体的には植民者の栄華と凋落についてのね。生きていくのに困らないのなら、富なんていかにちっぽけなものだってことをお前が理解できたらいのだが！ ——ポール、ハンカチをとっておくれ。（ポール、言いつけに従う）それで、生きていくのに困るようなら、富がどうしたなど言っていられなくなるわけだし！

アンリエット：（悲しげに）お母さまがこんなにも泣かなければ、私もお父さまと同じ境地なのだけど。

デュブル：どこかの百万長者がこう言っていたよ。財は幸福を生まないが、その助けになるとね。だが、そいつの考えは明らかに偏っていたし、先入観に囚われていた。わしは逆にこう考えているんだ。幸福こそが財を生む、とね！ わずかなもので満たされる者は誰からも羨ましがられる。なににも満たされない者たちのことを考えてごらん！ ——女中さん、食事の支度を！ ——もう腹ぺこだ——。わしはメデューズの筏^[3]を降りる！ ああ！ 頭で考えたことを糧にできるなら人は豊かだよ！ ——とは言え、たまのピフテキなら結構だ。——女中さん、ジャガイモを添えてな——だが哲学こそが——まずは火を通しすぎないようにしないといかんが——人の真の糧なのだ！ ——^{ヴァニタス}虚無の、^ザ行きなさい（命令するような仕事でカトリーヌへ）^{ニタートゥム}虚無^[4]。

カトリーヌ：（独白で）なんで私をニタートゥムと呼ぶのかしら。

デュブル夫人：（落胆し）さよなら、私の夢！ これからいったい、どうなってしまうの？

デュブル：（独白で）薬の効きめはどうか？

子どもたち：ママン、泣いちゃだよだよ。僕たちがキスするからね！

アンリエット：（両親を慰めながら）お母さま、お父さま、こんなにも長いご不在のあと、ついに全員がここに集まりました、これが幸福でなくてなんなのでしょう？ 家族みんなとの再会、誰ひとり欠けることなくキスを受けられるのはつまらないことでしょうか？ 見てください、私たちはお父さまをしっかり抱きしめています！ ポールとマルグリットときたらどうです、お父さまがお帰りになったことで、親たちの苦悩など頭にありません！ ——家族、これこそが真の富です。——ですからお二人はともにお金持ちなのですよ！

デュブール：（感動も露わに抱擁して）相変わらず、立派な娘だ！

アンリエット：みんなで働きましょう。投機には見放されましたが、ゆとりのある暮らしが手に入りますわ。

ポール：僕、字を書けるよ！

マルグリット：私は大きな文字を読むわ！

カトリーヌ：私は鍋を火にかけられますし、ご家族から離れませんわ！

アンリエット：（小声でカトリーヌへ）ことの次第をアンリに知らせてちょうだい。

カトリーヌ：（小声で）すぐに済みますわ。さっきまで、まだ窓のしたにいましたから。（アンリから渡された手紙をポケットから出し、独白で）ああこれこれ、そうだったわ！ アンリさんから預かっていたお嬢さまへの手紙……お渡しするのはまさに今だわ。（小声でアンリエットへ）これをどうぞ、お嬢さま。アンリさんがいらっしゃるまでのあいだに。（カトリーヌ退場）。

アンリエット：（急いで読む）アンリの手紙！ いったいこれは？ おお！ なんて貴きお心！ でもだめよ、絶対にだめ！ 今となってはそれは無理だわ！ ここに来させてはいけない！ カトリーヌ！ ——もう行ってしまった。おお、神さま！

デュブール：さて、子どもたち、わしは母さんと話があるんだ。（クララに）温かい食事を急ぎで頼む！（デュブールと妻を残し、全員が退場）。

第17場

デュブル氏、デュブル夫人

(二人ははじめ、言葉もなく見つめ合っている)

デュブル夫人：(独白で) こんなふうに戻ってきて、こんなふうに顔を合わせることになるなんて！ 私のした買い物！ 借金はどうなるの！ これじゃ貧乏どころじゃないわ！ 破産よ！

デュブル：(実に晴れ晴れとした様子で) なあ、お前、わたしの商売の調子はどうか？ わしがいないあいだに少しは金が貯まったかい？

デュブル夫人：貯まった……ですって？

デュブル：借金もなしかい？ ならば状況は明らかだ！ 手は空っぽ、ポケットも空っぽ！ この三年のあいだ、お前はなにをしていた？ いい夢を見て過ごしていたんだろうね？ ならば不幸なのは半分だけ、つまり一年半分だけだったってことだな！

デュブル夫人：(独白で) なんてのんきな！ 昔のあの人とは思えないわ！

デュブル：だから夢を見るのは今だよ、こんな今だからこそさ。とにかく希望を失っちゃいけない。時は来るがままに、財産は……来ないがままに！ アンリエットには芸事の才能がある！ それが役に立ってくれるだろう。

デュブル夫人：私は娘を貴婦人として育てました。あの子にどんな助けも求めないでちょうだい。

デュブル：(独白で) そうは見えなかったがな！ (声に出して) ともかく腕組みでもして待っていようや！ いつか相続という形で、なにに不自由ない暮らしができるようになるから！ どこかに80歳くらいの親類はいなかったかな？ いないか！ ならば、わたらは一文無しのなか？ なおさら結構だとも！ 将来這いあがるのも、わたら次第ってことだ！

デュブール夫人：（がっかりして）ねえ！ そんな物言いをしてしないで、私、死んでしまえようよ！

デュブール：なんだって！ こんなつまらないことなんだ、お前はドンと構えていればいいじゃない！ ひもじいのが怖い！ 貧しいのが怖いだって！ それがなんだって言うんだ。こういうのは生まれつきの苦しみなんだ！ ひもじさはね、豊かな魂の試金石さ！

デュブール夫人：おお！ 私には耐えられない！ もうだめだわ！ でも、あなたはあの呪われた国でなにをしていたの？

デュブール：ありとあらゆる仕事をしたが、パリと同じで、どこにでも手強い競争相手がいっぱい。船から商品をおろし、荷を担ぎ、街での買い付けをしたが、三ヶ月のあいだは運がよかったんだ、牛の番をしていたからね。ありゃ実入りのいい仕事なんだ。金の採掘についちゃ、最初から百万長者でない限り、論外だ。利益の出る金鉱床を買ったり、必要な道具をつくらせたり、作業者の日当を払ったり、あとからあとから生じる訴訟の費用をいつまでも支払わねばならん。それも毎回負けるんだがね。おまけに、恨み、復讐、火事、盗み、強盗、略奪が貸方の欄でずらりと数字の列をなす！ だからわしは双の手となって働いたのさ、肩に汗して糧を得ながら^[5]。それでも詩人が街路を掃き、政治家が長靴に蠟を塗っているのに比べたら、わしはまたずいぶんと恵まれていたよ。だからパリに戻った今、空腹を抱え、ボロを身にまといようと、わしが幸せじゃないなんてことがあるだろうか！

デュブール夫人：（激しい口調で）だけど借金とりたちが玄関でわめいているのが聞こえなかった？

デュブール：借金とりだって？

デュブール夫人：ああ！ ここではすべてが差し押さえられるわ。でも、それがはじまるのを待ちたくない！ このカシミアもドレスも全部、店に返すことにするわ。（腕を捻りながら）おお！ デュビュイッソン夫人の完勝ね！（ショールを畳もうとする）。

デュブール：（それをやめさせて）おっと、マダム・デュブール。わしの信

用をなくしたいのかい！

デュブル夫人：だけど商人たちにどうやって支払うの？

デュブル：(仰々しく) わしには契約書がある。カリフォルニアからの、
しっかりとつくられた契約書が！

デュブル夫人：支払い期限が来たら送り返さなければならないでしょ？

デュブル：そんなことないさ！ そのときにゃ借金とりたちを堂々と待ち
受けようじゃないか。

デュブル夫人：あの人たちが、来たときと同じようにただで帰っていくと
でも思っているの？

デュブル：(大げさに) 玄関から入ってきた借金とりは窓から出ていく、
それが一般的法則だろ！ わしらの借金とりたちもそうするんじゃない
か？

デュブル夫人：ああ！ 神さま！ 間違いない。あまりに不運な目にあっ
て、夫は気が触れてしまったのだわ！

デュブル：うろたえておるな、疑り深い妻よ！ わしのカリフォルニア行
きがまったくの無駄だったとでも？ まさか！ わしは今や、どんな社会
的地位にも就けるし、家庭生活のどんな仕事だってこなせるのさ！ わし
はわし自身の召使いにも、御者にも、給仕にも、小間使いにも、料理番に
も、仲間にも、馬車にも、馬にもなれる。そして、この活力、無頓着さ、
厚かましさをもって、われらが美しい国フランスが誇るもっとも資産ある
貴族階級を打ち負かしてやるつもりだ！ さて、食事の準備ができたか見
てきなさい。鳥のエピグラム [肉の調理法の一つ]^[6] のアスパラガス添
えがうまいこと調理されているかをな！

デュブル夫人：完全に頭がおかしいわ！ 耐えられない、私はもうだめだ
わ。(手を天に掲げ、上手から退場)。

第 17 場終わり、以下次回。

カトリーヌの言い替え

n°	page	カトリーヌの台詞と日本語直訳	正しい語、諺、慣用句
(1)	116	cette cour du roi Bêtaud ベトー王の宮殿	La cour du roi Pêtaud 收拾のつかない会合 ^[7]
(2)	116	ça sera autant de pris sur l'ennui. 面倒事からこれだけ得ただけでも儲けものだろう。	c'est autant de pris sur l'ennemi. (敵から) これだけ得ただけでも儲けものだ
(3)	117	ses pipe-assiettes ピーピー鳴いて皿をおびき寄せる人	pique-assiettes 食事をたかる人 (皿を盗む人)
(4)	117	Je la moleste à mon tour. 今度は私が彼女をぶん殴る番だ。	?
(5)	117	Le temps est un grand maigre 時は痩せた大男 ^[8]	Le temps est un grand maître 時は偉大な主 ^[9]
(6)	117	pleuvent dru comme graine 種のようにざあざあと降る	pleuvoir dru comme la grêle 雨あられと降る
(7)	117	voir hurler la chandelle par les deux bouts 蠟燭の両端が叫んでいるのを見る	brûler la chandelle par les deux bouts 体力を無駄に使う (蠟燭の両端を燃やすのは意味のない浪費)
(8)	117	carabin du bon Dieu 神の医学生	chérubin du bon Dieu 神の天使ケルビム
(9)	117	bat la Champagne シャンパーニュ地方を歩き回る	battre la campagne とりとめのないことを言う (野原をあてどなくさまよう) ^[10]
(10)	117	c'est là le chic. それがコツだ。	c'est là le hic それが難しい点だ。
(11)	118	Sacré-manteau ^[11] すばらしいコート	Sacramento サクラメント (カリフォルニア州の首都)
(12)	118	Vous resterez là planté comme une lanterne. 街灯のようにずっとそこにいる。	planté comme un piquet 杭のように直立不動でいる
(13)	118	au goût du genre その流儀の好みに合った	au goût du jour 今風の (今日の好みに合った)
(14)	118	le son d'une oie dans la tête 頭に一匹の鶩鳥の鳴き声	?
(15)	118	enverrait ses bulles visées à tous les diables 狙いをつけた泡を追っ払うだろう	envoyer ses billevesés à tous les diables たわ言をどこかに追いやる

(16)	118	(ne) fouetter que les deux marmailles 二人の子どもを鞭打つだけ	fêter les deux marmailles 二人の子どものために祝宴を張る
(17)	118	dans la sauce mourra le canard 鴨はソースのなかで死ぬ	dans sa peau mourra le renard ずる賢い者は最後までずる賢い（キツネは死ぬまでキツネ）
(18)	118	Impothéquer des cachemires sur les millions de Saint-Attrape-sot ?	imposture+hypothéquer ? ^[12]
(19)	118	Saint-Attrape-sot ^[13] バカを捕まえる聖人	San Francisco サンフランシスコ
(20)	118	une cinquième roue à une carotte 人參に五つめの車輪	une cinquième roue à un carrosse 無駄である（馬車に五つめの車輪は不要）

ページは本拙訳の底本とした Marc Soriano, *Portrait de l'artiste jeune. Les quatre premiers textes publiés de Jules Verne*, Paris, Gallimard, 1978, pp. 101–139. 収録版のそれを示す。なお「家庭博物館」に掲載された初出版 (*Musée des familles : lectures du soir*, 2ème série, tome 19, 1851–1852, pp. 257–271) も随時参照した。

[1] 広く流布している諺の正確な引用。

[2] ジャコモ・マイアベーアのオペラ『悪魔のロベール』（1831年初演）第1幕第7場でロベールが歌う曲の一節（多少改変されている）。同作曲家については、『海底二万里』のネモがその楽譜をノーチラス号に持ちこんでいるほか、他作品でも何度か言及がされている。なおマイアベーアはユダヤ系ドイツ人であり、ヴェルヌと共作もおこなっているジャック・オッフエンバックと境遇が似る。レーモン・ルーセルもまたマイアベーアを好んでいた。『悪魔のロベール』初演時にロベールを演じたのは超絶な高音でならしたテノール歌手アルフォンス・ヌーリであり、ルーセルは『ロクス・ソルス』（1914年）の一挿話にヌーリを登場させている。

[3] 1816年、フリゲート艦メデューズ号が難破し、生存者は筏で漂流した。その極限状態を生々しく描いたテオドール・ジェリコーの絵画（1818–19年）がよく知られる。ヴェルヌはのちにこの事件——とりわけ食人へのオブセッション——にインスピレーションを受け、『チャンセラー号』（1874年）を書くだらう。

[4] 旧約聖書「伝道の書」(1.2)「コヘレトは言う。なんとという空しさ／なんとという空しさ、すべては空しい」（日本聖書協会訳）のラテン語による引用

(vanitas vanitatum)。ただし、ここでは va (フランス語で「行きなさい」) が切り離され、言葉遊びになっている。マルク・ソリアーノは、このラテン語はフランス語に替えることで解ける暗号であり、中学生レベルの卑猥な冗談だとする。すなわち、「Va (in) tas (ses), va ;/ n'y tate homme (s) », Marc Soriano, *op. cit.*, p. 47 (立ちション便所に行っても手でしごくな)。tasse は *vespasienne* の隠語で男性が立って小用を足す共同便所、男性ホモセクシャルの社交場だった。ありがたい忠言だが、女性のカトリーヌに言う必要はあまりないような気もする……。

- [5] 一般的な言い回しは旧約聖書「創世記」(3.19)にある「お前は顔 [もしくは額] に汗を流してパンを得る」(日本聖書協会訳)。カトリーヌのもじり癖がデュブールに伝染したともとれるが、ヴァリエーションの範囲で地口とまでは言えないかもしれない。
- [6] この料理名 *épigramme* は「諷刺詩」と同音同綴語。
- [7] *pétaudière* (収拾のつかない会議) という語の語源。Littré, *Le Petit Robert* によれば、ベトーは 16 世紀の架空の王 (名の由来については諸説ある)。権威のない王で、その宮殿では誰しものが主であり勝手なことを言ったことから。ラブレール『第三之書』(第 6 章。本戯曲同様、結婚に絡んだパニユルジュの議論のなかで)、またモリエール『タルチュフ』の冒頭 (第 1 幕第 1 場) にも言及がある。カトリーヌ=ヴェルヌはこの名に *bête* (バカ) をかけ、最小限の音素である P と B の差異を利用して地口にしているが (*Pétaud/Bétaud*)、これはルーセル (手法) の代表例である *pillard/billard* のペアを彷彿させる。
- [8] 諺。あるいはピエール・コルネイユ『セルトリウス』(第 2 幕第 4 場) に「時は偉大な主なり、それはことを丸くおさめる」という一節がある。
- [9] この地口はカトリーヌ=ヴェルヌ以前にいくつかの言及例がある。とりわけバルザック『幻滅』第二部「パリに出た地方の偉人」(1839 年)において、ルストーがリュシアンに「ヴォードヴィル座のミネットの台詞だけど、『時は痩せぎすの大男』って言葉を知っているだろ?」と問う一節が知られる。リーヴル・ド・ポッシュ版の脚注においてパトリック・ベルティエは「ミネットことジャンヌ・メネストリエ (1789 年~ 1853 年) は 1813 年から 1827 年までヴォードヴィル座に出演していた。バルザックはここで『時は偉大な主なり』という諺のもじりをこの女優の言としているが、この言葉遊びはのちに『人生の門出』(1842 年)でも用いられる。ただしゴーチエの劇評にも同じ言い回しが見られることから、人口に膾炙していたものと思われる」としている。Honoré de Balzac, *Illusions perdues*, édition établie et annotée par Patrick Berthier, Paris, Le Livre de poche, coll. « classiques », 2006, p. 325. ヴェルヌがパリに上京するのは 1847-8 年のことであり、ミネッ

トの時代はとうに去っていた。一方で『幻滅』ないしはその他のテキストからネ・タを拝借した可能性はある。なおヴォードヴィル座について言うと、ヴェルヌとシャルル・ワリュによる合作で、ヴィクトリアン・サルドウの手直しを受けて完成した喜劇『11日間の包囲戦』が1861年、ブルス広場に移転後の同劇場において上演されている。フォルカー・デース『ジュール・ヴェルヌ伝』石橋正孝訳（水声社、2014年）、165-167ページを参照。

- [10] レーモン・クノーはこの慣用句を気に入っており、1968年発表の詩集のタイトルとしたほか、『青い花』（1965年）冒頭では *battre* の成句をほぼ網羅した以下のセリを展開している。「*Il [=Auge] ne battit point sa femme parce que défunte, mais il battit ses filles au nombre de trois ; il battit des serviteurs, des servantes, des tapis, quelques fers encore chauds, la campagne, monnaie et, en fin de compte, ses flancs.* », Raymond Queneau, *Les fleurs bleues*, Paris, Gallimard, coll. « folio », 1978, p. 14. 同箇所の手訳はレーモン・クノー『青い花』（水声社、2012年）、10ページ。
- [11] 第1場に既出。
- [12] *impothéquer* はカトリーヌお得意の地口（ヴェルヌの造語）と思われるが元の語が判然としない。*imposture*（ベテン）と *hypothéquer*（抵当に入れる）を掛け合わせたものか？ 別の台詞に『タルチュフ』への暗示もある。
- [13] 第2場に既出。